

モザイク通信

No.135 Nov. 2025

発行：モザイク会議 議長 森敏美

モザイク会議事務局：〒185-0012 東京都国分寺市本町 4-12-4 司アートシティ 104

モザイク会議ホームページ：<https://maa-jp.com/> Email: maaj@maa-jp.com

編集／作成：モザイク会議運営委員会

2026 年テーマ展の会場・会期が決まりました！

モザイクテーマ展 2026 は仙台市の晩翠画廊に決まりました！皆様奮ってご参加下さい。

期日は 2026 年 12 月 8 日（火）～12 月 13 日（日）です。

詳細は決まり次第、メールで配信いたします。

モザイク展2025 あざみ野 <報告>

2025 年 9 月 3 日（水）～9 月 15 日（月）、横浜市民ギャラリーあざみ野で 1 階はモザイク展 2025、2 階ではモザイク会議設立 30 周年を記念する展示を開催しました。期間中は約 1000 名に近い方々に来場して頂きました。講評会及び表彰式後には審査員の方々も交えて懇親会を開き、和やかに会話を弾みました。

会場の展示はユーチューブ画像（モザイク会議ホームページにもリンクあり）で配信しておりますのでご覧下さい。



モザイク展2025 あざみ野 <受賞者>

受賞者は以下のように決まりました。（敬称略）

- 大賞 森敏美 「AMBIVALENCE2509」
- 名古屋モザイク賞 及び モザイクタイルミュージアム賞
飯野夏実 「2025年の日記-元旦から祖父の納骨まで」
- 二席 平田恵利子 「雨の日晴れの日」
- 三席 若月弓枝 「Start Of The Day」
- 佳作 荻島摩美 「Pino（松）」
- 佳作 今野栄子 「花（マグノリア）」
- 佳作 玉鬼深友季 「The Sense of Wonder」

大賞 森敏美 「AMBIVALENCE2509」



名古屋モザイク賞
及び
モザイクタイルミュージアム賞

飯野夏実

「2025年の日記-元旦から祖父
の納骨まで」



二席

平田恵利子

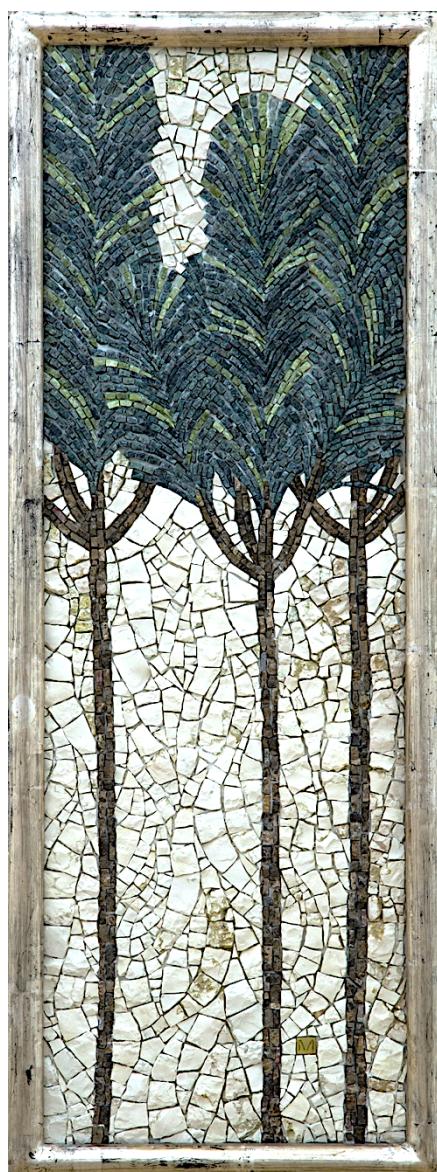
「雨の日
晴れの日」



三席 若月弓枝 「Start Of The Day」



佳作
荻島摩美
「Pino (松)」



佳作 今野栄子 「花（マグノリア）」



佳作 玉鬼深友季 「The Sense of Wonder」



モザイク展2025 あざみ野 <講評>

2025年モザイク展 受賞作品講評 要約

相澤 昭郎 名古屋モザイク工業(株)



森敏美 「AMBIVALENCE2509」部分

本展の受賞作品群は、モザイクが単なる装飾美術ではなく、現代における表現芸術として確立し得ることを鮮やかに示しました。

大賞「AMBIVALENCE2509」は、空き缶を含む多様な廃材を組み合わせ、正面から歩み出す象を力強く描いた作品です。リサイクル素材を昇華させ、環境との共生や再生の象徴を宿す点が高く評価されました。

名古屋モザイク賞「2025年の日記-元旦から祖父の納骨まで」は、一日ごとの出来事や感情を文字と造形で記録し、モザイクを「日記的証言」として文化史的に意義づけた独創的な試みです。

「Start Of The Day」は天然石の荒々しさと柔らかな色彩を対比させ、大地の目覚めを詩的に表現しました。「Pino(松)」は緑濃い樹木を端正に構成し、生命の垂直性と自然の精神性を静かに伝えています。「雨の日、晴れの日」は少數のテッセラと余白を活かし、日常の光と影を寓話的に描きました。「マグノリア」は花と抽象的形態を並置し、自然と人間精神の交錯を表現しています。

これらの作品は、伝統的な緻密な技法、素材の拡張、記録性や物語性、象徴性といった多様な要素を兼ね備え、モザイク表現の未来を切り拓く大きな前進となりました。

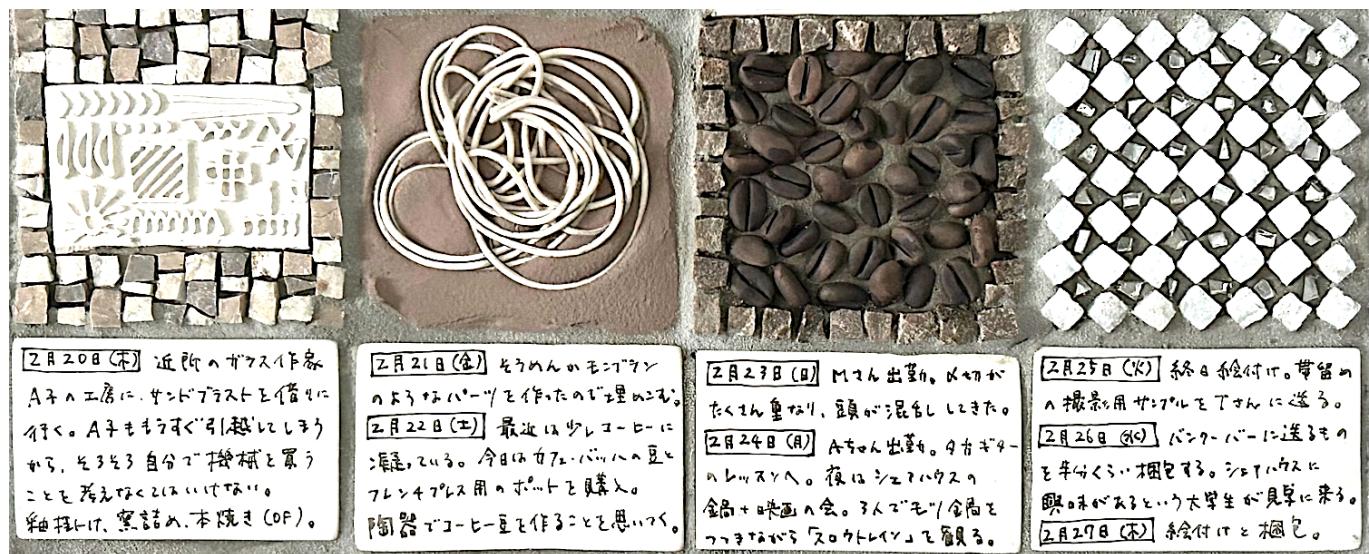
モザイク展 2025 及びモザイクタイルミュージアム賞についてコメント

服部 真歩 多治見市モザイクタイルミュージアム

このたび、モザイク会議設立30周年記念として「モザイク展2025」が盛大に開催されましたこと、心よりお祝い申し上げます。また、これまで多治見市モザイクタイルミュージアムの展覧会やイベントにご協力いただいているみなさまにおかれましては、今回の記念すべき展覧会にも審査員として関わる機会をいただき、大変光栄に存じます。

本展には、一般公募を含む41名の作家が出品しており、素材や技法は多岐にわたりました。それぞれの作家が持つ独自の視点と探究心が存分に表現され、非常に見応えのある展示となっていました。2階の「モザイク会議の30年」会場では、昨年度開催された「モザイクの散歩道」の再現展示をはじめ、モザイク会議の活動の軌跡や歴代議長の作品を通じて、30年にわたる歩みの広がりと深まりを実感できる構成となっていました。また、本展にあわせて制作された映像作品《日本のモザイク壁画と床45選》では全国各地に点在するモザイク作品が紹介され、来場者にとってモザイクをより身近に感じることができる有意義な機会となったと思います。

モザイクタイルミュージアム賞の選定にあたっては、「タイルという素材が作品でどのように活かされているか」という点を評価軸として拝見しました。今回、同賞に選出させていただいた飯野夏実様の《2025年の日記 元旦から祖父の納骨まで》は、タイルを用いた記録表現という観点から、非常に印象深い作品でした。2025年元旦から約半年にわたり、自ら焼成された磁器タイルに毎日数行の日記を記し、それに呼応する形で約7cm角のモザイク作品を組み合わせた、連作形式とも言える作品です。タイルの表面にはヤスリがけが施され、陶芸用上絵具を用いて書き記された文字を焼成することで、まるで紙にペンで綴ったかのような柔らかな筆致が表現されていました。ここに、陶による表現への挑戦意識を感じました。



飯野夏実 「2025年の日記-元旦から祖父の納骨まで」部分

日記を積み重ねて全体として構成されている点にも、ある種のモザイク的な表現を見出すことができ、その点も評価いたしました。日々の記録をモザイクと結びつけたこの表現手法は、モザイク作品が「記録」や「記憶」の媒体としても機能し得ることを示しており、本分野の表現の可能性をさらに広げる作品であったと受け止めています。

改めまして、モザイク会議のこれまでのご功績に敬意を表するとともに、今後ますますのご活躍をお祈り申し上げます。また、「モザイク展2025」にご出展された皆さまの今後のご活躍を心より楽しみしております。

モザイク講評

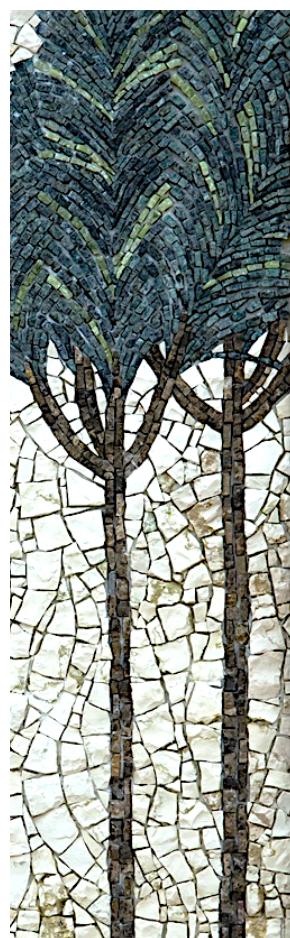
土方明司

川崎市岡本太郎美術館館長 武藏野美術大学客員教授

今回初めて審査に参加させていただいた。思えばモザイク作品の魅力と出会ったのは、いまから40年以上も前のことである。大学時代、バックパッカーでヨーロッパを2か月間旅行した。その折訪ねた、イタリア・ラベンナで数々のモザイク作品に出合った。宝石のような美しさと、抽象性に秘められた表現力の豊かさ。控えめな表現が却って見る者的心に深く響く。以後、モザイク作品には特別な思いを抱いてきた。

若月弓枝 「Start Of The Day」部分

さて、今回の出品作品について。まず全体的な印象として、各自の好みにあわせ、多様な素材を作品にしていることに驚いた。大理石をはじめ様々な石のほか、タイル、ガラス、貝殻、テラコッタ、ビーチガラス等々。その素材の特徴を生かした作品が多く、作り手の工夫と創意が伝わった。次に素材と共に多様な表現がみられたことも印象的であった。技法を駆使し、細かな表現を試みる作品から、抽象的な作風、内面性の表現を重視したものなど、実に幅の広い表現があった。モザイク・アートの幅の広がりと、多様な可能性を改めて感じた次第である。



荻島摩美
「Pino (松)」部分

次に受賞作品について。佳作賞の荻島摩美の「Pino (松)」は、モザイクの本来の素直な表現が好感を持てた。樹木の垂直性を生かした構図も効果的。玉鬼深友季の「The Sense of Wonder」は、とても意欲的な作品。作品に込めた作者の強い思いが伝わる。今野栄子の「花 (マグノリア)」は、自在なフォルムが秀逸。ユーモアとウイットを感じさせモダンな感覚が光る。



玉鬼深友季
「The Sense of Wonder」部分



今野栄子
「花 (マグノリア)」部分

三席、岩月弓枝の「Start Of The Day」は、素材の魅力を生かし存在感あふれる作品。目に見えぬ気配を表そうとする意欲が込められ、現代美術に通じる作品。

二席、平田恵利子の「雨の日 晴れの日」は、シンプルな造形ながら豊かな表情を持った作品。インスタレーション風の展示も効果的。けれんみ無い手法がかえって印象的であった。

大賞の森敏美の「AMBIVALENCE 2509」は作者の表現意欲と技法が一致し、完成度の極めて高い作品となっている。全体の構図から細かな部分に至るまで、良く考えられており存在感のある作品。素材の選択などにも現代社会への寓意性が感じられた。



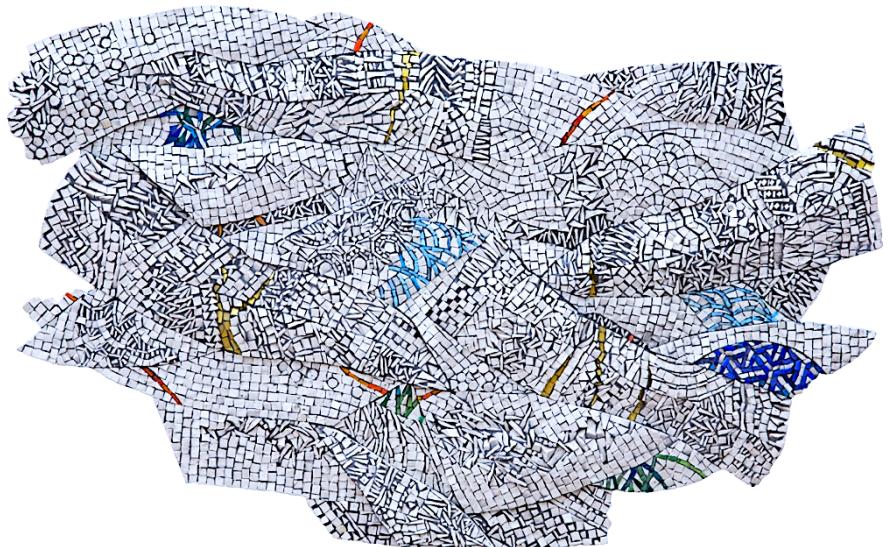
平田恵利子 「雨の日晴れの日」部分

イメージと物語を紡ぎ裂く秘物たちの戯れ

藤井雅実 美術評論家

モザイク表現を含む創作物が、日常とは異なる景色を開くと、悦びや驚きが喚び覚まされる。その創作では、慣れ親しんだ情景と異質の茂みを模索する工夫が駆使される。その点で絵も音楽も小説や映画も「茂差異工=モザイク」とも表せる特性を持つと言えます。その中でモザイクは、物の細片を織り上げる点で、絵画などと異なる特質を発揮する。前回展の記事でも記したように、「碎かれた細片」を<日常とは異なる情景>へ茂らせ工夫し祭る「茂碎工・茂祭工」であり、その創作と観る悦びへ人を駆り立てる「茂材駆」…等の当て字(文字の茂材工)でその特性を暗示できるでしょう。ちょい無理やり当て字ですが、芸術も研究も「未知の異界を探り誘う工夫」では何らかの<無理やり性>は大切です。

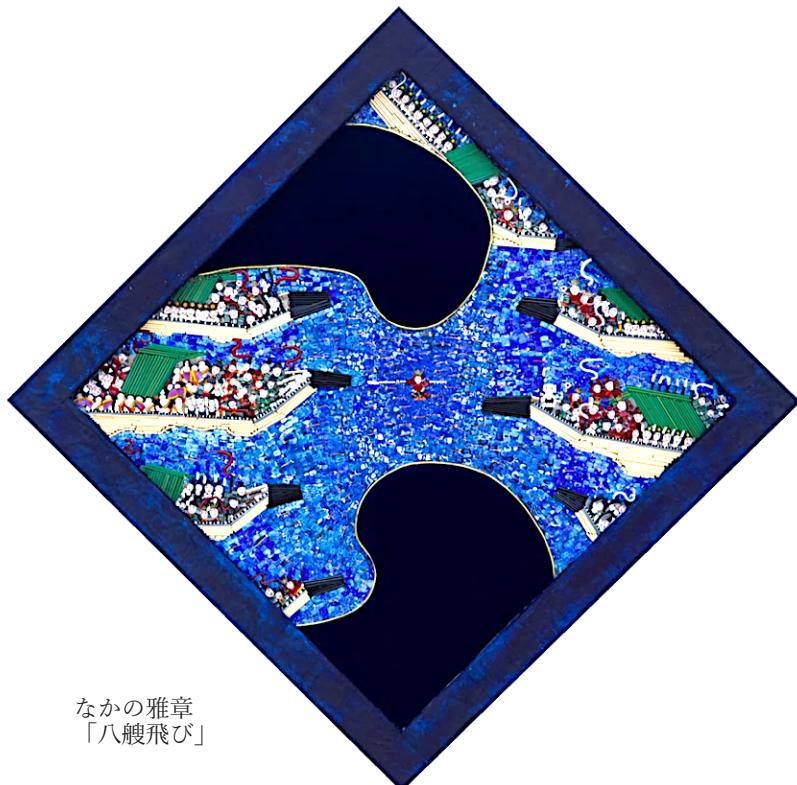
人間の経験は、感覚や感情など感性の経験に、幼少期からの他者たちとの言語を介した交流(社会・間主観的経験)が絡み合って育まれる。その基盤に、無数の物の基盤がある。この物質層から人々との社会的関係の層が多層に錯綜し絡み合うことで、芸術を含め人間の経験が生じます。造形芸術では、絵具や様々な物



喜井豊治 「そして繰り返す」

質を媒材に、視覚象が構成されて、そこに様々な物語も絡められ、作品として提示される。そしてモザイクでは、様々な物の破片が単に像や物語の媒材に留まらず強い存在感を保つ。

大賞: 森敏美さん「AMBIVALENCE 2509」: 森作品は今世紀初めの頃以来、逆三角型を中心に展開し、次第に「翼を広げた鳥」の姿となり、コロナ禍以後は、翼を広げた天使の姿も重なりました。鳥は空から下界を俯瞰し、天使は下界と異界とを媒介する。第二次大戦前の不安な状況下にクレーが描いた「新しい天使」、それをベンヤミンは「歴史の天使」と捉え返し、戦渦の瓦礫に未知の希望を示唆した。



なかの雅章
「八艘飛び」

森の天使も、ある物や情況に潜む危うさと希望や悦びなど、異質な両価性(anbivalence)を宿し展開する。本作ではその天使が象の姿を纏って、自然の森人々の生活の森の瓦礫化を危ぶみ、出現したかのよう。英語の諺にある「象は忘れない(An Elephant Never Forgets)」とは、「象は被った害を忘れず応報する」という警句(名探偵ポワロ・シリーズでも使われた)。世界各地での森林減少などで人里に象や熊などが出没する今日、震災の瓦礫や様々な廃物も組み込んだ森の象は、厳しい眼差しで、危機とその裏に潜む希望との両価性を告げる時代の天使か。

二席: 平田恵利子さん「雨の日 晴れの日」: いくつもの家形の支持板で、雲から降る雨と日差しが左右に配され、その間に、木々や動物や人の姿がある。人や動物の手足は木の幹さながら伸ばされ、雲や陽と地のつながりが深められ、十字架の下で手を取り合う二人の姿が、愛の巣を示唆する家形に刻まれる細片たちの煌めきと共に、歓びの物語を浮ばせる。それを受けるように……

三席: 若月弓枝さんの「Start Of The Day」が、新たな日の始まりを、過去と差異をなす未知の情景を紡いで行く。若月さんの作品は、モザイク表現特有の、物の細片が地層のように積み上げられ、破片と積層の物質感が際立ちます。その、イメージや物語を剩余する細片の物質感が、猛り絡み合う中に、鳥や動物や植物を思わせるイメージが浮かび漂いもするかのよう。

佳作: 玉鬼深友季さん「The Sense of Wonder」: 自然と人工物の織物の中に、果て無き謎も潜むこの世界というセンス・オブ・ワンダー。その一面が、木や草や鳥などを象った像で、喚び覚まされる。若月作品とは逆に、切り取られた形の絡み合いを基に、それを織り上げる細片の質感が重なって、自然の造形美が人の匠の技で変奏される。

佳作: 今野栄子さんの「花（マグノリア）」は、マグノリア（木蓮）の花言葉…自然への愛や崇高、忍耐、威厳、持続などの物語を暗示するようなイメージが並ぶ。そして、そうした物語とイメージを剩余するテッセラの茂みが、花言葉を形やイメージを響き重ねるかのよう。

なかの雅章さんの「八艘飛び」は、微小なテッセラで描かれる物語へと“発想が飛び”、多くの戦士や波紋が緻密に描かれた壇ノ浦の戦いが描かれる。古の語り物を足場にして、微小な細片の煌めきが、戦士たちの表情や波紋の煌めきとの織物となっている。



杉山高行
「月のなかま」

モザイクタイルミュージアム賞：飯野夏実さん「2025年の日記-元旦から祖父の納骨まで」。磁器タイルに緻密な加工を加え、日記絵の部分には様々なパーツが詰め込まれた基盤。そこに、身辺な出来事から社会問題まで様々な話題が、多様なイメージと言葉とで記されて層をなし、その連なりが、時の層を紡いでいます。

杉山高行さん「月のなかま」は、いくつもの三日月型が絡み合う中、人の姿や波などを思わせるシルエットが明滅し、細やかな律動感が満ちる。喜井豊治さん「そして繰り返す」は、テッセラの緻密な積層が創る不定な形の重なりと反復が波打って、重厚な存在感を発現する。佳作の荻島摩美さん「Pino(松)」は、引き伸ばされた松の幹が、平田作品の人型と響き合うかのよう。松本治子さん「日常と感覚の交錯」は、縦横に配されたカード型に、多様な縦横の文様が配され、そのカラフルな律動の感覚が喚起される…その他、興味深いものが色々ありました。



松本治子
「日常と感覚の交錯」

モザイク芸術は、「物の細片の織り合わせ」で創る制約ゆえ、物の細片の集積が、イメージにも物語にも絡み込み、物の質感が憑き纏い、それが情景や物語の深淵も開く。本文の語りもまた、物の細片の織物たちに絡まれて、それに応じることで、「単語や論理を切り重ねる<言語のモザイク>」へ誘われ、未知の語りと思考の享楽を探り紡ぐ、貴重な機会をいただきました。そこから振り返れば、モザイクというジャンルは、実用性を第一義とするかの近代文化の工芸という枠を脱し、現代のアートシーンの中でも特異な意味の場を育みつつある。そしてモザイク特有の制約を活用することで、今のモザイク表現もまた縛る暗黙のフレームに潜むだろう様々な亀裂を探り、新たな密林探査への扉を開くことが期待されるでしょう。

※著者の関連テキスト

1:モザイク・アート関連

1a:「モザイク芸術 欲動の小さなかけらが繁茂し開く異界」（モザイク通信 No.122 2021年）

1b:「細片の積層と錯綜が織りなす魅惑と享楽」（モザイク通信 No.129 2023年）

1c:「世界の錯綜とアンビバレンス」（森敏美・2024年、ギャラリーロードの個展冊子）

2:現代芸術を含むモダンからポストモダンへの文化状況問題

「二種の四角片 Double Squares が誘う不穏と魅惑」改訂版。ネットマガジン『まどか通信』2024年夏号

<https://madokainst.tx-d.art/2024/07/10/>

3:芸術の構造問題

特異像(シンギュラル・イメージ)としての絵画--<外>の/への私的言語の享楽』『21世紀の画家、遺言の初期衝動 絵画検討会 2018』高田マル・編 <https://kaiga.myportfolio.com/1>

4: その背景にある人間特有の高度な(動物から見れば変態的な)欲望から、人工知能の欲望実装の問題を論じた「AI は死の欲動を実装できるか?」『人工知能美学芸術展 記録集』人工知能美学芸術研究会 (AI 美芸研) https://www.aibigeiken.com/store/aiae_ac.html

・その他、Wikipedia の藤井雅実の頁の著作欄などご覧ください。

宮内淳吉初代議長 追悼

モザイク会議初代議長である宮内淳吉さんがご逝去されました[9月21日、88歳にて永眠]。葬儀は家族葬でなされ、モザイク会議からは弔電とお花を送らせて頂きました。

追悼ミサは11月8日（土）に聖イグナチオ教会マリア聖堂で多くの参列者の中、執り行われました。

モザイク展2025に出展された作品「鳥と虫と」が遺作となり
作品写真が東京新聞に掲載されました。





宮内淳吉 「鳥と虫と」

宮内順吉先生追悼文

橋村元弘

誌上をお借りしてお悔やみ申し上げます。

最初に宮内さんと付き合いをさせてもらったのは五反田のゆうぼうとのフレスコ画の光り壁を作る仕事でした。ひたすらコテで壁をコスル仕事でした。他にモザイクも手作り漆喰で大理石やズマルトで貼ったのだが、手がなくて苦労しました。1階で貼り5階迄運ぶのにパラパラ落ちてしまい、宮内さんに直してもらうのに大変苦労をかけてしまいました。

次は帯広市庁舎のフレスコ画とその中にモザイクを作る仕事でした。フレスコ画を作るのに石灰の倍近くの砂を入れたものを練ってコテ板から塗るのだが、なかなか隙間につかなく、力を入れすぎると光ってしまいダメ出しを何度もされた。塗り直そうとしても力を入れすぎると水分が浮いて来てフレスコ画が光てしまいダメ出しをされ泣けてきました。そのフレスコ画の中にモザイクを貼るのだが、そのモザイクを作るよう言われた。訳もわからず花を丁寧に作っているとリアルな花はダメだと言われた。まばらにモザイクを点々と入れておけば良いとズマルトを出して、チョンチョンと入れておけば良いと言われた。それ迄花を丁寧に作っていたのを注意され目から鱗でした。これも薄い漆喰壁に貼るのが大変でした。

宮内さんにフレスコを始めモザイクを沢山教えてもらっておけば良かったです。

宮内さんありがとうございました。色々ありましたが以上です。

宮内さんという貴重な存在

喜井豊治

モザイク会議初代議長、宮内淳吉さんは2025年9月21日で亡くなりました。享年88歳

モザイクの専門家が現れたのは戦後のことです。1948年に羽田空港にタイルモザイクが作られ、1952年には矢橋大理石にモザイク工房、1957年近代モザイク社、1958年ガラスモザイカ販売が開業するなど、モザイクを作る環境は整いつつありました。

そういう時代、宮内さんは武蔵野美術大学在学中に、長谷川路可氏のもと「壁画集団F・M」を結成し（1960～70年）、フレスコとモザイクを学び、以降、その道に専念します。モザイク壁画の制作に関わる人は多かったのですが、壁画と同時に自分の創作活動として小品をコンスタントに作り画廊で発表する人は、長い間宮内さん以外にはいなかったのではないでしょうか。人望は厚く、後進の面倒見も良く、日本のモザイクを育てたひとりです。そして長い間日本のモザイクの歩みを見てこられた方です。

モザイク会議は1995年に設立され、初代議長は異論なく宮内さん。議長は2度務めましたが、それ以外の期間も常にモザイク会議の活動の核として求心力を示しました。

技巧に走らない、詩的な作風に心酔する人は多くいます。

ご冥福を祈ります。

宮内淳吉：主なモザイク壁画

- 1991年 横浜市青葉区市ヶ尾彫刻プロムナード
「ユニコーンのいるバードテーブル」 共同制作・宮内淳吉、中野滋、平井一嘉
- 1995年 横浜市青葉区総合庁舎敷地内立体
「田園ふあんたじい」 共同制作・宮内淳吉、関孝行
荒川区 峠田小学校「ともだちひゃくにん」
- 1996年 本郷カトリック教会小聖堂 フレスコ壁画
- 1999年 千代田区麹町、聖イグナチオ教会、マリア聖堂
- 2014年 豊田市、青松こども園

会費納入のお願い

2025 年度の会費(1 万 2 千円)の納入をお願いいたします。入金は 2026 年 2 月末日迄となります。

振り込み先

ゆうちょ銀行口座記号：10000

番号：97185511 モザイクカイギ

他銀行からの振り込みの場合は以下になります。

ゆうちょ銀行 店名：008（ゼロゼロハチ） 店番：008

普通預金口座：97185511 名義：モザイクカイギ



モザイク展 2025 あざみ野 表彰式及び懇親会の様子

